

神を見る人

(イザヤ書6章1～7節)

マタイによる福音書5章8節)

皆様の中にお読みになった方もおられると思いますが、アメリカ新聞とテレビで連載され、百万部以上売れるベストセラーにもなった、「子どもたちの祈り」という本があります。

無邪気で想像力豊かな子供たちの祈りは、読む人に楽しみとともに私たちが忘れていた神様に対する真っ直ぐな心を取り戻してくれます。「かみさま、どうしていちどもテレビにでないの?」「かみさま、あなたはどうしてじぶんがかみさまだってわかったんですか。」「どうしてかみさまのおくさんのなまえがせいしよにでてこないの?かいたときけっこんしてなかったの?」「わたしがじてんしゃをたのんだのに、まだとどいてないの、わすれたの」など、子どもらしい話にほほ笑む気持ちになります。子どもたちは見えないが、神様がおられることを確信しているのです。何の疑いもなく、神様に声をかけています。祈っているのです。

しかし、大きくなると、本当に神様はおられるのか、神様がおられるならばなぜこのようなことがあるのだろうか、と思うときもあり、神様という存在について疑い、信仰さえ揺れることがあるのです。見えない存在への不確実性に耐えられなくなり、見える形としての神様を必要とします。

神様がどのような方であるかを知りたい、見えない神様の存在を体で感じたいと願う人々の思いは、神の形や像を造り、それを神の姿にして、そのような思いを満たそうとするのです。しかし、見える神の形はもはや神ではなく、人間の思いに支配される被造物にすぎないのです。人間の手で作られた神はもう神とは言えない人間の作品にすぎないからです。ですから、神様は「あなたはいかなる像を造ってはならない」と言われたのです。そして、旧約時代においては人間が神様を見ることもできないし、見える神の形を作ってもいけなかったのです。

私たち罪ある人間は聖なる神様を見ることができないのです。しかし、今日朗読しましたイザヤ書6章で「わたしは高く天にあるみ座に主が座っておられるのを見た。衣のすそは神殿一杯に広がっていた。上に方にはセラフィムがいて、それぞれ六つの翼をもち、二つをもって顔を覆い、二つをもって飛び交っていた。」と述べています。イザヤ預言者は神様を見たのです。そのような神様のお姿を見て「災いだ、私は滅ぼされる。私は汚れた唇のもの。汚れた唇の民の中に住むもの、しかも、私の目は王なる万軍の主を仰ぎ見た。」と恐れ慄きます。当時神の名を呼ぶことさえ、怖ろしいことであるのに、ましてや罪ある人間が神様を見ることは死を意味するのです。聖なる神様を見たイザヤ預言者は死ぬしかない状況になりますが、セラフィムのひとりが、飛んで来て手にもっていた祭壇から火鉢で取った炭火で清めてくださったのです。口に火を触れさせて「見よ、これがあなたの唇に触れたのであなたの咎は取り去られ、罪は赦された。」とイザヤ預言者に言います。セラフィムは「燃える」という言葉からで炎の御使いを意味します。聖なる霊によって清められたともいえます。神様の御助けによってイザヤ預言者は生き残ることができました。罪ある人間は聖なる神様を見てはいけなかったのです。

しかし、今日朗読しましたマタイによる福音書の5章8節には「心の清い人々は幸いである。その人たちは神を見る」と書かれています。幸い、祝福の一つとして神を見ることができるとおっしゃってい

るのです。ここでは、私たちが神を見ることは呪いや死ではなく、祝福なのです。イエス様は弟子たちに向かって言われました。神を見る幸いな人がいる、しかし、誰もが見ることができるのではなく心の清い人が見るのだということです。私たちが心が清いならば神を見ることもできるのです。

ここで清いという言葉は「カサロス」「カタロス」とも言いますが、きれいな、汚れていない、無垢な、混じりけのない、という意味です。それは言葉とおりに純粹で清潔な意味もありますが、混じりけがない、神様への従順、神様のみに従う純真な心の状態ともいえるでしょう。

しかし、神様は言われました。「・・・人が心に思うことは、幼い時から悪いのだ・・・(創世記 8:21)」

エレミヤ預言者も言います。「17:9 人の心は何にもまして、とらえ難く病んでいる。誰がそれを知りえようか」。イエス様もおっしゃいました。「マタイ 15:17～すべて口に入るものは、腹を通して外に出されることが分からないのか。しかし、口から出て来るものは、心から出て来るので、これこそ人を汚す。悪意、殺意、姦淫、みだらな行い、盗み、偽証、悪口などは、心から出て来るからである。これが人を汚す。しかし、手を洗わずに食事をしても、そのことは人を汚すものではない」

使徒パウロを通してこのように語っています。「正しい者はいない。一人もいない(ローマ 3:10)」つまり、義人は誰もいない、心が清い人はいない、ということです。

では、だれが心の清い人で、神を見ることができるのでしょうか。

詩編記者はこのように願っています。51 編「私の咎をことごとく洗い、罪から清めてください。母が私を身ごもったときも私は罪のうちにあったのです。私が清くなるように私を洗ってください。雪よりも白くなるように。神よ、私のうちに清い心を創造し、新しく確かな霊を授けてください。」自分が咎と罪をもっている人間であることを深く自覚し、嘆いて願っているのです。なぜなら、清い心は神様から与えられるものであるからです。神様が私たちを清めてくださらなければ清くなることはできないのです。心が清くなるとは努力してできるものではなく、神様が私たちのうちに清い心を創造してくださらなければ成し得ないことなのです。

使徒ヨハネはこのように証言しています。「いまだかつて、神を見たものはいない。父のふところ独り子である神、この方が神を示されたのである。」また、ヨハネの手紙 3:2 には「愛する者たち、私たちは今既に神の子ですが、自分がどのようになるかはまだ示されていません。しかし、御子が現れるとき、御子に似たものとなるということを知っています。なぜなら、そのとき御子をありのままに見るからです。御子にこの望みをかけている人は皆、御子が清いように、自分を清めます。」と書かれています。つまり、神の御子を見ることは神を見ることであり、心が清められることなのです。

私たちが縛るもの、奴隷にするもの、死と滅びに導くもの、それは罪なのです。私たちを汚れ者にして、神様から引き離そうとするのです。しかし、主イエスキリストの十字架によって清められるのです。私たちは私のために十字架で死んでくださった神を見るのです。私の罪を赦し、私を自由にしてください。私に光を照らしてくださる方、その方を見るのです。そのような人は霊的な目が開かれ、神を見ることもできるのです。まさに祝福された方です。混じりけがない、主に対する純真な心をもって歩む人は神を見ることもできる。

海老名教会の皆さんの信仰の目が開かれ、神様がここにおられる、私のそばにおられる、私たちの間に主がおられる、という信仰的な体験ができますように。私たちと共におられる神様を見ることもできる祝福がありますよう願います。